

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：生活環境学科

資格：講師

氏名：岸川 洋紀

研究分野	研究内容のキーワード
環境学	環境リスク, 騒音, 公衆衛生
学位	最終学歴
博士(工学), 修士(工学), 学士(工学)	京都大学大学院工学研究科 都市環境工学専攻 博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科非常勤講師	2009年04月～2010年03月	環境共生概論, 生活環境論の講義を担当
2. 大阪産業大学人間環境学部都市環境学科非常勤講師	2005年09月～2011年03月	音環境学, 騒音・振動論の講義を担当

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 武庫川女子大学女性研究者支援センタースタートアップ支援講座	2016年08月01日	統計学セミナー：回帰分析の基礎－重回帰分析とロジスティック回帰分析の基本的事項－
2. 武庫川女子大学女性研究者支援センタースタートアップ支援講座	2016年08月01日	統計学セミナー：Excelで重回帰分析をしてみる
3. 武庫川女子大学女性研究者支援センタースタートアップ支援講座	2015年07月29日	統計学セミナー：検定と多変量解析の基本的な考え方

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 生活を科学する	共	2014年3月	光生館	横川公子, 瀬口和義, 岸川洋紀, 他 第5章「生活の質を科学する」を担当した。健康影響の科学的評価, リスクアセスメントの事例をもとに科学的に物事を観察し評価することはどういうことか記述するとともに, 生活の質の捉え方に関して検討を行った。
2. 医療経営白書2007第1編第2章「療養病床再編で病院経営に問われるものとは」	共	2007年10月	日本医療企画	安川文朗, 岸川洋紀 医療費の高騰の中で課題となっている療養病床のあり方について検討するとともに, レセプトデータからの分析結果をもとに, 医療費高騰の原因について検討を行った。
2 学位論文				
1. 騒音感受性を考慮した騒音影響の評価方法に関する研究	単	2007年03月	京都大学工学研究科都市環境工学専攻 博士後期課程学位論文	道路沿道, 新幹線沿線の住宅地における質問紙調査を実施し, 疫学的な視点から統計解析を行い以下の結論を得た。騒音に対する反応の個人差を評価する指標であるWeinstein scaleには問題があることを指摘するとともに, 改良版である尺度を提案した。提案した尺度を用いて騒音に対するアノイアンスを評価した所, 居住者の騒音反応の個人差を適切に評価可能なことが確認された。また, 騒音による影響として, 居住者のメンタルヘルスへの健康影響に着目し, 騒音曝露によって心理的な影響だけでなく, 睡眠妨害を介したと推測される健康影響が発現することを明らかにした。さらに, 騒音による健康影響に関しても居住者の感受性が大きく関連することを確認し, 今後は居住者の個人差を考慮しながら, 心理影響だけでなく健康影響へ着目した騒音対策を行っ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
2. 騒音感受性の評価手法に関する研究—生体指標および主観的健康感に基づいた検討—	単	2004年3月	京都大学工学研究科環境工学専攻 修士論文	ていくことが重要であることを示した。
3. 騒音に係る新旧環境基準の達成状況の比較	単	2002年3月	京都大学工学部地球工学科環境工学コース 卒業論文	
3 学術論文				
1. 日本人の発がん性大気汚染物質に対する許容リスクの選択に関する考察（査読付）	共	2016年	日本リスク研究学会誌26巻2号, 67-76	村山留美子, 藤長愛一郎, 岸川洋紀, 内山巖雄 2014年2月に行った環境リスクに関する全国を対象とした質問紙調査結果, および1999年から2008年にかけて行った同種の調査結果から, 日本人の大気中の発がん性化学物質に対するリスク認知について検討を行った。1999年から2014年にかけて大気中の発がん性化学物質に対する許容リスクとして高いレベル（危険側の選択）が選択される変化があること, 年間許容リスクレベルとしては10万人に1人というレベルがもっとも選択されること, ゼロリスクを志向する回答者は全体の5%程度であることなどを明らかにした。
2. 犯罪被害者等の実態から見えてくる暮らしの支援の必要性—511名の犯罪被害者等のWEB調査実態調査から—（査読付）	共	2016年	厚生 の指標63巻11号, 23-31	大岡由佳, 大塚敦子, 岸川洋紀, 中島聡美 犯罪被害者等の苦悩の程度や生活の実態・支障を把握し, 今後の犯罪被害者支援の在り方を模索するため。2015年に511名の犯罪被害者を対象としたWEB調査を行った。分析の結果, 犯罪被害者等の精神的苦悩は深刻であり, 被害者の暮らしを支える制度・サービスの拡充・広報の充実・適切な相談支援が行える地方公共団体等の体制整備が必要であることが明らかとなった。統計解析等のデータ分析の一部について担当した。
3. 日本人のリスク認知と個人の属性情報との関連（査読付）	共	2012年	日本リスク研究学会誌22巻2号, 111-116	岸川洋紀, 村山留美子, 中畝菜穂子, 内山巖雄 全国の成人を対象とした面接質問紙調査の結果から日本人のリスク認知の特徴について, 日本人は自分に対する場合よりも社会全体へのリスクを高く評価する傾向があること, 個人に対するリスク認知は, 学歴が高く小さな子供を持ち都市部に居住する回答者ほど高くなること, 社会に対するリスク認知は年代が上になるほど高くなることなどを明らかにした。
4. 土壌・地下水汚染におけるリスクコミュニケーションの必要性—東京都北区豊島地区の住民へのグループインタビュー—（査読付）	共	2010年	日本リスク研究学会誌20巻3号, 211-219	藤長愛一郎, 村山留美子, 内山巖雄, 岸川洋紀, 中畝菜穂子 ダイオキシン汚染が問題となった東京都北区豊島地区の住民へグループインタビューを行い, 住民側が最初にリスクマネジメント側の情報に不信を抱いてしまうと, それを解決するために余計な労力が必要となること, 行政や土地所有者は, 継続的に住民の考えを聞く場を持ち, 住民の要望に真摯に答える姿勢を示すこと, また対策の決定に参加することがお互いにとって満足できる解決方法として重要であることなどを明らかにした。
5. Noise sensitivity and Subjective health—Questionnaire study conducted along trunk roads in Kusatsu, Japan—（査読付）	共	2009年	Noise & Health, Vol.11(43), 111-117	Kishikawa H, Matsui T, Uchiyama I, Miyakawa M, Hiramatsu K, Stansfeld SA 道路沿道での騒音測定および主観的健康感について尋ねた質問紙調査から, 騒音によるメンタルヘルスへの影響について検討を行った。高感受性群では騒音による健康影響が発現しやすく, 低感受性群では発現しにくいことを明らかにし, 騒音影響評価における個人差の考慮の重要性を示した。また, 健康影響と睡眠妨害の関連を示すとともに, 高感受性群ほど睡眠妨害と健康影響との関連が強いことを明らかにした。
6. 国民健康保険レセプトデータを用いた奈良県の医療の実態に関する分析（査読付）	共	2009年	厚生 の指標56巻1号, 15-20	岸川洋紀, 安川文朗 奈良県の国保レセプトデータを用い医療費の実態を明らかにすることを目的とした。若年層では医療費の地域差はみられないが, 高齢者においては都市部ほど医療費が高くなることを明らかにした。これらの要因は主に受診率の差によるものであることを示した。入院外においては, 受診率とレセプト当たり医療費の間に強い負の相関関係があることを示した。患者の受療行動や医師誘発需要により医療費が影響を受けている可能性を示した。
7. 道路交通騒音・振動による健康影響と生活妨害の関係（査読付）	共	2008年	騒音制御32巻1号, 71-79	宮川雅充, 川久保裕, 岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄 道路沿道で行った騒音振動測定結果と主観的健康感を尋ねた質問紙調査結果から健康影響と生活妨害の関連を検討した。その結果, 対象地域での健康影響が振動による睡眠妨害によって生じていることを明

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
8. 新興感染症発生時のマスコミ報道に関する研究—新聞記者を対象としたグループインタビューによる検討— (査読付)	共	2007年	日本リスク研究学会誌17巻1号, 105-113	らかとするとともに、5dBの振動削減によって大幅に睡眠妨害と健康影響を削減できることを示した。また、現行の振動評価法では住民への影響を適切に評価できないことを示した。 岸川洋紀, 村山留美子, 内山巖雄 2002年から2003にかけて世界的に流行したSARSについて、当時の日本国内でのマスコミでの報道の在り方を調査するため、新聞記者を対象としたグループインタビューを行った。インタビューの結果、当時のメディアの新興リスクへの報道姿勢や情報源などについて明らかとするとともに、行政とマスコミとの関係についての課題を示した。また、今後のリスク報道に対する姿勢などの問題点を指摘した。
9. 新幹線騒音・振動による主観的健康の低下—騒音感受性を考慮した質問紙調査— (査読付)	共	2007年	騒音制御31巻2号, 158-165	岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄, 大門信也 兵庫県尼崎市において新幹線騒音振動による住民への影響を調査するため、騒音振動測定および質問紙調査を行った。その結果、新幹線高架沿線において、高レベルのうるささ反応や生活妨害に加え、愁訴などの主観的健康被害が増加することを明らかとした。また、高感受性群において健康影響がやすいこと、影響の原因は睡眠妨害であることを明らかとし、早朝、夜間の騒音振動の軽減により被害の効率的な低減を図れることを示した。
10. 日本人のリスク認知に関する調査研究—2005年の調査結果について— (査読付)	共	2007年	日本リスク研究学会誌17巻3号, 53-62	村山留美子, 岸川洋紀, 中畝菜穂子, 内山巖雄 日本人のリスク認知について検討を行うため、全国の2000人を対象とした面接調査を行った。様々なリスク項目に対する、危険度や被害確率の認知、主観的な知識の有無、政府の対策の充分さなどについて、一般市民の認知を示した。また、これらの関係について検討するとともに、日本人が個人に対するリスクと社会に対するリスクを分けて考える性質があることを確認した。
11. Salivary chromogranin A as a measure of stress response to noise (査読付)	共	2006年	Noise & Health, Vol. 8 (32), 108-113	Miyakawa Masamitsu, Matsui Toshihito, Kishikawa Hiroki, Murayama Rumiko, Uchiyama Iwao, Itoh Toshihiro, Yoshida Takahiko ストレスホルモンの指標として用いられているクロモグラニンA (CgA) を用いて、騒音曝露によるストレスホルモンの増加について検討した。その結果、曝露によって唾液中のCgA濃度がすぐ上昇し、曝露停止後は下降することを明らかとした。既存のストレスホルモンの調査は血液の採取が必要であったり、長期曝露の評価であったりしたが、CgAを用いることにより、短期曝露の簡易的な評価が行えると考えられる。
12. The development of Weinstein's noise sensitivity scale (査読付)	共	2006年	Noise & Health, Vol. 8 (33), 154-160	Kishikawa H, Matsui T, Uchiyama I, Miyakawa M, Hiramatsu K, Stansfeld SA 騒音感受性評価によく用いられているWeinstein質問紙調査について、フィールド調査をもとに妥当性を検討した。その結果、この質問紙には感受性ではなく騒音曝露やアノイアンス反応そのものを尋ねている質問が含まれており、得られた質問結果が騒音反応と相関を示すことは交絡されたものであることを示した。また、回答者の反応バイアスによる影響についても検討を行った。両問題点を改善した改良版の質問紙WNS-6Bを提案した。

その他

1. 学会ゲストスピーカー				
1. 騒音による健康影響	単	2014年12月10日	日本自動車研究所2014年度第1回講演会	騒音による健康影響に関しては、騒音性難聴が古くから知られている。騒音性難聴は作業場など非常に高レベルの騒音曝露下で生じる健康影響であり、生活空間で曝露される環境騒音では健康影響は生じないと考えられてきた。しかしながら、近年、疫学調査などによって、日常生活で曝露されるレベルの騒音によっても、様々な健康影響が生じることが明らかとなっている。騒音による健康影響には虚血性心疾患リスクの増加なども含まれ、生命に関わる重大な問題であるが、我が国において騒音による健康影響について公衆衛生上の対策は十分にとられているとは言い難い。 そこで、騒音による健康影響に関して、現在得られている知見を紹介するとともに、騒音による健康リスクの大きさについて考える。また、今後の騒音研究や騒音対策において、健康影響の視点をどのように組みこんでいくべきかについて考察を行う。
2. 学会発表				
1. Long-term exposure to ambient air pollution and ischemic heart disease	共	2016年10月	2016 Annual International Society of Expos	Sakai H, Morikawa T, Toda Y, Ito T, Ito A, Koike H, Kishikawa H, Ono M, Azuma K, Nakai S, Uchiyama I

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
rt disease among elderly residents of Tokyo metropolitan area, Japan			ure Science (ISES) Meeting, Utrecht, The Netherlands, 9-13 October 2016	yama I
2. 東京都都市部の高齢者における大気汚染物質と騒音の曝露と虚血性心疾患との関連性の断面調査	共	2016年09月	第57回大気環境学会年会	堺温哉, 森川多津子, 小池博, 富田幸佳, 伊藤晃佳, 伊藤剛, 岸川洋紀, 小野雅司, 東賢一, 中井里史, 内山巖雄 (第57回大気環境学会年会, 2E1130)
3. Association between environmental noise and subjective symptoms related to cardiovascular diseases among elderly people: a Japanese population-based study	共	2016年06月	Conference of International Society for Environmental Epidemiology and International Society of Exposure Science Asia Chapter 2016 June 26-29, 2016, Sapporo, Japan	Kenichi Azuma, Hiroki Kishikawa, Haruya Sakai, Tazuko Morikawa, Akiyoshi Ito, Tsuyoshi Ito, Hiroshi Koike, Masashi Ono, Satoshi Nakai, Iwao Uchiyama
4. リスク認知研究におけるインターネット調査の有効性に関する検討	共	2015年11月	日本リスク研究学会第28回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 藤長愛一郎, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第28回研究発表会講演論文集, B-1-2, PP. 25-26)
5. 全国調査からみた3.11に関わる市民の情報収集について	共	2015年11月	日本リスク研究学会第28回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 藤長愛一郎, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第28回研究発表会講演論文集, A-2-4, PP. 41-42)
6. 大気中の発がん性化学物質に対する各種認知の変動について	共	2015年11月	日本リスク研究学会第28回研究発表会	村山留美子, 藤長愛一郎, 岸川洋紀, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第28回研究発表会講演論文集, D-6-2, P. 118)
7. 全国調査からみた3.11に関わる市民の各種認知について	共	2015年11月	日本リスク研究学会第28回研究発表会	村山留美子, 藤長愛一郎, 岸川洋紀, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第28回研究発表会講演論文集, A-2-5, PP. 42-43)
8. 震災後の放射線リスクの住民の受け止め方について—福島県住民へのインタビュー調査—	共	2015年11月	日本リスク研究学会第28回研究発表会	藤長愛一郎, 村山留美子, 岸川洋紀, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第28回研究発表会講演論文集, A-2-2, PP. 38-40)
9. Estimation of Individual Exposure to Traffic-related Air Pollution and Traffic Noise: Epidemiological Study in the Tokyo Metropolitan Area, Japan	共	2015年10月	The International Society of Exposure Science, 25th Annual Meeting	H. Sakai, A. Ito, T. Ito, T. Morikawa, H. Koike, Y. Toda, H. Kishikawa, M. Ono, K. Azuma, S. Nakai, I. Uchiyama
10. 東京都葛飾区の高齢者における大気汚染物質と虚血性心疾患の関連性の調査	共	2015年09月	第56回大気環境学会年会	堺温哉, 森川多津子, 富田幸佳, 小池博, 伊藤晃佳, 伊藤剛, 岸川洋紀, 中井里史, 小野雅司, 東賢一, 内山巖雄 (第56回大気環境学会年会, 3C1515)
11. 東京都葛飾区の高齢者を対象とした騒音曝露と虚血性心疾患の断面調査	共	2015年09月	日本騒音制御工学会研究発表会	岸川洋紀, 小池博, 堺温哉, 森川多津子, 富田幸佳, 伊藤晃佳, 伊藤剛, 中井里史, 小野雅司, 東賢一, 内山巖雄 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 19-22)
12. 震災後の放射線リスクの社会的なあり方について—福島県伊達市住民へのグループおよび個人インタビュー—	共	2014年11月	日本リスク研究学会第27回研究発表会	藤長愛一郎, 村山留美子, 岸川洋紀, 内山巖雄, 中畝菜穂子 (日本リスク研究学会第27回研究発表会講演論文集, B4-2)
13. 大気中の発がん性化学物質に対する許容リスクレベルの変動について	共	2014年11月	日本リスク研究学会第27回研究発表会	村山留美子, 岸川洋紀, 藤長愛一郎, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第27回研究発表会講演論文集, C2-2)
14. 震災・放射線リスクの情報収集に関する分析	共	2014年11月	日本リスク研究学会第27回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 藤長愛一郎, 中畝菜穂子, 内山巖雄 (日本リスク研究学会第27回研究発表会講演論文集, C3-2)
15. 大気汚染物質、騒音と虚血性心疾患の関連性に関する疫学調査(進捗状況)	共	2014年09月	第55回大気環境学会年会	堺温哉, 伊藤剛, 古根村綾乃, 森川多津子, 小池博, 富田幸佳, 伊藤晃佳, 岸川洋紀, 中井里史, 小野雅司, 東賢一, 内山巖雄 (第55回大気環境学会年会, 2C1115)
16. 震災後の放射線リスクに対する情報収集について—全国を対象とした面接質問紙調査による解析—	共	2013年11月	日本リスク研究学会第26回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 藤長愛一郎, 中畝菜穂子, 内山巖雄 東日本大震災後のリスク情報の収集の現状について、全国の4,000名を対象とした質問紙調査結果から検討を行った。その結果、放射線に関するリスク情報は強く必要とされているが、十分には伝達が行えていない現状が確認された。また、高齢者においてリスク情報への関心が薄く、高学歴のものほど関心が高いことが明らかとなった。実際に情報入手でき

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
17. 原子力発電所に対する市民の各種 認知の震災前後の変化について	共	2013年11月	日本リスク研究学会第2 6回研究発表会	ているものは女性よりも男性に多いことが確認され、この原因としてリスク情報の収集に用いているメディア媒体の差が関連している可能性が示された。 (日本リスク研究学会第26回研究発表会講演論文集、B5-2) 村山留美子、岸川洋紀、藤長愛一郎、中畝菜穂子、内山巖雄 全国の4,000名を対象とした質問紙調査を行い、震災前後でのリスク認知の変化について検討した。原子力発電所の危険性やイメージは震災後に大きく悪くなっているが、原子力発電所による恩恵に対する認識は変化していないことが明らかとなった。また、火力発電所などの他の発電所に関するリスク認知はやや変化しているものの、自動車や食品添加物といった他のリスクに対する認知は震災前後で特に変化していないことが示された。 (日本リスク研究学会第26回研究発表会講演論文集、B1-1)
18. 震災後の放射線リスクの住民の受け止め方について—福島市住民および関西自主避難者へのグループインタビュー—	共	2013年11月	日本リスク研究学会第2 6回研究発表会	藤長愛一郎、村山留美子、岸川洋紀、内山巖雄、中畝菜穂子 2011年の震災および原発事故後の被災者の状況について情報を収集し整理するため、福島在住の被災者と県外への自主避難者へインタビュー調査を行った。その結果、震災直後の様子については両者に差はみられないものの、その後の放射線リスクに対する情報収集やリスク認知に差がみられ行動にも違いがあらわれたことが示された。 (日本リスク研究学会第26回研究発表会講演論文集、B5-4)
19. 大気汚染物質、騒音と虚血性心疾患の関連性に関する疫学調査（予備調査の研究デザイン）	共	2013年09月	第54回大気環境学会年 会	堺温哉、伊藤剛、古根村綾乃、森川多津子、小池博、富田幸佳、伊藤晃佳、岸川洋紀、中井里史、小野雅司、香川順、内山巖雄 2014年度実施予定の自動車由来の大気汚染物質および騒音曝露による健康影響調査について、事前に実施した予備調査計画の概要と結果について報告した。 (第54回大気環境学会年会、2E1100)
20. 大気汚染物質、騒音と虚血性心疾患の関連性に関する疫学調査（質問票予備調査の結果）	共	2013年09月	第54回大気環境学会年 会	堺温哉、伊藤剛、古根村綾乃、森川多津子、小池博、富田幸佳、伊藤晃佳、岸川洋紀、中井里史、小野雅司、香川順、内山巖雄 2014年度実施予定の疫学調査に向けて予備調査を行い、本調査で用いる質問紙の妥当性を確認した。予備調査の結果、質問紙の妥当性や調査対象者の抽出方法に問題はないことが確認された。また、質問紙の配布方法に課題がみつかったため本調査では改善を行う。 (第54回大気環境学会年会、2E1130)
21. 大気汚染物質、騒音と虚血性心疾患の関連性に関する疫学調査（曝露評価方法の検討）	共	2013年09月	第54回大気環境学会年 会	伊藤晃佳、森川多津子、小池博、富田幸佳、堺温哉、伊藤剛、古根村綾乃、岸川洋紀、中井里史、小野雅司、香川順、内山巖雄 2014年度実施予定の疫学調査に向けて、本調査で用いるための対汚染物質および騒音の推計方法について検証を行い、提案した手法の妥当性と課題について報告した。 (第54回大気環境学会年会、2E1115)
22. 衣料品の再利用に関する消費者意識の調査	共	2011年11月	第22回廃棄物資源循環 学会	岸川洋紀、嶋口菜由加 女子大生を対象とした質問紙調査を行い、衣料品の再利用やリサイクルの推進について検討を行った。調査の結果、環境意識の高さと衣料品の回収行動との関連は認められず、衣料品の回収行為は環境行動として意識されていないことが明らかとなった。また、パンフレットなどによる広報の効果についても検討し、情報を発信していくことで衣料品の回収が促進される可能性を示した。 (第22回廃棄物資源循環学会、PP. 35-36)
23. 東日本大震災前の日本人の原子力 発電所に関する危険度の認知につ いて	共	2011年11月	日本リスク研究学会第2 4回研究発表会	村山留美子、中畝菜穂子、岸川洋紀、内山巖雄 2011年3月に起こった震災および原子力発電所の事故をふまえて、震災以前の日本人の原子力発電に対する意識を過去の調査データから検討した。社会全体に対しては原子力発電所は危険なものと認識されている一方で、自分や家族などの個人に対して危険であると考える人の割合は2010年まで徐々に減少していることが示された。 (日本リスク研究学会第24回研究発表会講演論文集、PP. 103-107)
24. 日本人のリスク認知の構造2—リ スク認知要素間の関連—	共	2010年11月	日本リスク研究学会第2 3回研究発表会	岸川洋紀、村山留美子、中畝菜穂子、内山巖雄 全国の2,000名を対象とした面接質問紙調査を行い、リスク項目に対する危険度の認知と日常生活での使

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. 日本人のリスク認知の構造3—行動・意識との関連—	共	2010年11月	日本リスク研究学会第23回研究発表会	用状況との間の弱い関連、危険度の認知とリスク項目の必要性の認知や恩恵の認知との間の関連を明らかとした。 (日本リスク研究学会第23回研究発表会講演論文集, PP. 141-146)
26. 日本人のリスク認知の構造1—調査概要および過去データとの比較—	共	2010年11月	日本リスク研究学会第23回研究発表会	中畝菜穂子, 村山留美子, 岸川洋紀, 内山巖雄 全国の2,000名を対象とした面接質問紙調査を行い、喫煙者と非喫煙者の両者でたばこに対するイメージは悪く、車の所有者と非所有者の両者で車の安全性に対する認知は高く、それぞれのグループ間であまり差がないことを明らかとした。 (日本リスク研究学会第23回研究発表会講演論文集, PP. 73-75)
27. 土壌汚染対策におけるリスクコミュニケーションの必要性—東京都北区豊島地区の住民へのグループインタビュー—	共	2009年11月	日本リスク研究学会第22回研究発表会	村山留美子, 中畝菜穂子, 岸川洋紀, 内山巖雄 1999年に行ったリスク認知に関する調査結果と2010年に行った調査結果を比較したところ、ほとんどの項目において変化が見られず、日本人のリスクに対する意識は最近の10年間でほとんど変わっていないことを明らかとした。 (日本リスク研究学会第23回研究発表会講演論文集, PP. 135-140)
28. リスクに対する対策の要求とリスク認知との関連	共	2009年11月	日本リスク研究学会第22回研究発表会	藤長愛一郎, 村山留美子, 内山巖雄, 岸川洋紀, 中畝菜穂子 ダイオキシン汚染が問題となった東京都北区豊島地区の住民へグループインタビューを行い、リスクマネジメント側の情報に住民が不信感を抱くと以後のコミュニケーションに大きな問題が生じることを確認し、迅速な情報の伝達手段の確立が重要であることを示した。 (日本リスク研究学会第22回研究発表会講演論文集, PP. 109-114)
29. 日本人の発がん性大気汚染物質に対する耐容リスクの選択に関する考察	共	2009年11月	日本リスク研究学会第22回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 中畝菜穂子, 藤長愛一郎, 内山巖雄 リスク認知に関する面接調査を行い、回答者全体ではリスクに対する危険度の認知と対策の要求との関連を確認したが、個人レベルでは両者の関連は比較的弱く、必ずしも一対一の対応はないことを示した。 (日本リスク研究学会第22回研究発表会講演論文集, PP. 125-130)
30. リスク判断とそれに係る他の認知要因の関連について—2008年全国面接調査より—	共	2008年11月	日本リスク研究学会第21回研究発表会	村山留美子, 中畝菜穂子, 岸川洋紀, 藤長愛一郎, 内山巖雄 大気汚染物質のリスク管理について質問紙調査を行い、一般市民の許容リスクレベルについて調べるとともに、一定数存在するゼロリスクを要求する回答者の属性などについて検討を行った。 (日本リスク研究学会第22回研究発表会講演論文集, PP. 143-148)
31. 大気汚染による発がんリスクに対するゼロリスク要求に関する一考察	共	2008年11月	日本リスク研究学会第21回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 中畝菜穂子, 藤長愛一郎, 内山巖雄 2,000人を対象とした面接調査から日本人のリスク認知について検討した。その結果、日本人のリスクに対する危険度の認知は確率成分に対する認知によって形成されており、必ずしも結果の程度の成分は含んでいないことを明らかとした。 (日本リスク研究学会第21回研究発表会講演論文集, PP. 145-150)
32. 日本における中皮腫発症リスクの将来予測に関する研究	共	2008年03月	日本衛生学雑誌68巻2号	村山留美子, 中畝菜穂子, 岸川洋紀, 藤長愛一郎, 内山巖雄 環境問題におけるベネフィットとリスクの受け入れを拒否し、リスクはゼロでなければならないと主張する市民の意見について検討を行った。 (日本リスク研究学会第21回研究発表会講演論文集, PP. 27-32)
33. 騒音曝露により生じる心循環器系疾患のリスク評価	共	2008年02月	日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2008-10	明神大也, 東賢一, 岸川洋紀, 村山留美子, 奥村二郎, 内山巖雄 過去のアスベストの使用状況と中皮腫死亡者の関連から今後の死亡者数を予測した。計算には海外での予測式の改良版を用いた。結果、今後もアスベストによる死亡者は増加し数万人のオーダーとなると予測された。 (日本衛生学雑誌, 68巻2号, P. 444)
				岸川洋紀, 村山留美子, 松井利仁, 内山巖雄 騒音曝露によるリスク評価について、曝露人口の推定方法を中央環境審議会の曝露予測に基づいた方法へと変更するとともに、計算の課題や今後の騒音政策の課題についてまとめた。 (日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2008-10)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
34. 地域特性からみた市民の震災リスク認知に関する研究	共	2007年11月	日本リスク研究学会第20回研究発表会	平山修久, 内山巖雄, 村山留美子, 岸川洋紀, 中畝菜穂子, 河田恵昭 地震に対するリスク認知に対して, ここ最近のうち大きな地震を体験した地域とそうでない地域で認知が異なるか検討を行った。 (日本リスク研究学会第20回研究発表会講演論文集, PP. 471-476)
35. 道路交通騒音曝露による心疾患リスクの評価	共	2007年11月	第10回音響学会関西支部若手研究者交流研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 松井利仁, 内山巖雄 騒音曝露によるリスクの計算結果について, 音響学会の研究発表会で報告した。 (第10回音響学会関西支部若手研究者交流研究発表会概略集, P. 18)
36. 病床減少時代の医療経営行動と意思決定	共	2007年11月	経営行動科学学会第10回年次大会	岸川洋紀, 安川文朗, 英裕雄, 川北英隆, 坂梨薫, 志田京子 医療費の地域差について, 奈良県のレセプトデータを用いた分析結果を報告し, 医療機関へのアクセスビリティによる患者の受療行動の問題などについて報告した。 (経営行動科学学会第10回年次大会, シンポジウム)
37. 騒音曝露による虚血性心疾患のリスク評価	共	2007年09月	日本騒音制御工学会研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 松井利仁, 内山巖雄 騒音曝露による健康影響のリスク評価について, WHO欧州事務局の提案している方法を取り入れ再計算を行い, 結果を報告した。 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 85-88)
38. Noise sensitivity and subjective health —Questionnaire study conducted along trunk roads—	共	2007年08月	Inter-Noise 2007	Toshihito Matsui, Hiroki Kishikawa, Iwao Uchiyama, Masamitsu Miyakawa, Kozo Hiramatsu, Stephen A. Stansfeld 道路沿道での騒音曝露による健康影響の実態について, 国際学会で報告し, 騒音曝露によってメンタルヘルスへの影響が生じることを明らかとした。 (Inter-Noise 2007, 28-31 August 2007 Istanbul, Turkey)
39. 我が国におけるリスク認知と個人の属性に関する研究 (1)	共	2006年11月	日本リスク研究学会第19回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 中畝菜穂子, 内山巖雄 2,000人を対象とした面接調査結果から, 日本人のリスク認知について検討した。クラスタ分析により, リスク認知には大きな傾向があることを示した。また, 学歴や居住地域などによって有意にリスク認知が異なることを示した。 (日本リスク研究学会第19回研究発表会講演論文集, PP. 407-412)
40. 我が国におけるリスク認知と個人の属性に関する研究 (2)	共	2006年11月	日本リスク研究学会第19回研究発表会	村山留美子, 岸川洋紀, 中畝菜穂子, 内山巖雄 日本人の個人に対するリスクと社会に対するリスクを分けて考える傾向について, 面接調査結果から検討を行い, 10年ほど前に行われた結果と同じくこの傾向が依然強いことを明らかとした。 (日本リスク研究学会第19回研究発表会講演論文集, PP. 413-417)
41. 騒音による健康影響のリスク評価	共	2006年11月	日本リスク研究学会第19回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 松井利仁, 内山巖雄 騒音曝露による健康影響について, 虚血性心疾患を対象としてリスク評価を行い他の環境因子によるリスクとの比較を行った。騒音によるリスクが高いことを明らかとし, 対策の必要性を述べた。 (日本リスク研究学会第19回研究発表会講演論文集, PP. 1-6)
42. 騒音感受性と回答バイアスが騒音反応の個人差に及ぼす影響	共	2006年11月	日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2006-53	岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 回答者の反応バイアスのについて明らかにするとともに, 対照地域と曝露地域での反応を用いることにより, 反応バイアスの調整方法を提案した。 (日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2006-53)
43. 生活妨害とアノイアンスの個人差に関する研究	共	2006年09月	日本騒音制御工学会研究発表会	岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 生活妨害およびアノイアンスに関する質問紙調査から, 回答者の反応バイアスによる調査結果の交絡の影響などについて検討を行った。 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 233-236)
44. 許容できる騒音被害と慣れ—成田国際空港周辺での質問紙調査—	共	2006年07月	環境衛生工学研究20巻3号	松井利仁, 岸川洋紀, 内山巖雄, 平松幸三, 森尾謙一, 山下晃一, 大橋心耳, 森田巖, 林直樹 騒音による影響に対する慣れという概念に対して調査を行い, 慣れの実態について検討を行った。 (環境衛生工学研究, 20巻3号, PP. 63-66)
45. 道路交通騒音・振動による複合影響	共	2006年02月	日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2006-9	宮川雅充, 岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄 道路交通騒音による影響について騒音振動の測定結果から, 騒音による影響と振動による影響を分離し

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
46. 新幹線騒音・振動による健康影響と生活妨害	共	2006年02月	日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2006-10	て検討することを試み、振動の影響の大きさを示した。 (日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2006-9) 岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄, 大門信也 新幹線騒音振動による各種影響について、生活妨害との関連を検討し、睡眠妨害を減らすための対策をとることが必要であると提言を行った。 (日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2006-10)
47. 新興感染症へのマスクの対応に関する調査—新聞記者を対象としたグループインタビューによる検討—	共	2005年11月	日本リスク研究学会第18回研究発表会	岸川洋紀, 村山留美子, 内山巖雄 SARS事例におけるマスクの対応やリスク報道における今後の課題について、インタビュー結果を報告した。 (日本リスク研究学会第18回研究発表会講演論文集, PP. 201-206)
48. 感染症に関する一般市民のリスク認知の構造 (1) —調査概要および感染症問題の情報源とその信頼性について—	共	2005年11月	日本リスク研究学会第18回研究発表会	村山留美子, 中畝菜穂子, 岸川洋紀, 内山巖雄 感染症の報道について、一般市民がどのような情報源から情報を得ているのか、その信頼度はどの程度かといった点に関して面接調査を行い、結果を報告した。 (日本リスク研究学会第18回研究発表会講演論文集, PP. 207-212)
49. 感染症に関する一般市民のリスク認知の構造 (2) —リスク回避行動との関連—	共	2005年11月	日本リスク研究学会第18回研究発表会	中畝菜穂子, 村山留美子, 岸川洋紀, 内山巖雄 リスクに対する認知の違いが普段の行動やリスクに直面した時の行動とどう関係しているのかといった点について面接調査結果から検討を行った。 (日本リスク研究学会第18回研究発表会講演論文集, PP. 213-217)
50. 新幹線騒音・振動による生活妨害と健康影響	共	2005年09月	日本騒音制御工学会研究発表会	岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄, 大門信也 新幹線沿線地域での騒音振動による健康影響および個人差に関するフィールド調査結果について報告を行った。 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 93-96)
51. 種々の音源に対する住民反応を利用した音環境の評価方法	共	2005年09月	日本騒音制御工学会研究発表会	宮川雅充, 岸川洋紀, 川久保裕, 松井利仁, 内山巖雄 アンケート調査の回答結果を一次的に示すのではなく、クラスター分析を用いた手法を用いた手法により二次元のマップとして示す方法を提案した。 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 13-16)
52. Noise sensitivity and subjective health: an analysis based on a field study conducted on a residential area along trunk roads.	共	2005年09月	The planning of urban energy and environmental systems, The second seminar of JSPS-VCC group 7	Kishikawa H., Matsui T., Uchiyama I. 道路交通騒音振動曝露による主観的健康感の低下について、騒音感受性を考慮した分析を行った。GHQ28質問紙によるメンタルヘルスの健康評価、サブスケールによる身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害の項目が高感受性群において騒音曝露と関連することを示した。うつ傾向の因子については騒音とは無関係であった。 (The second seminar of JSPS-VCC group 7:, PP. 1-7)
53. 幹線道路近傍の住民に対する騒音と振動の複合影響	共	2005年03月	日本騒音制御工学会研究発表会	宮川雅充, 川久保裕, 岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄 幹線道路近傍の住民を対象に質問紙調査を行い、調査対象地域において、主として振動による睡眠妨害が生じていることを明らかとした。 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 29-32)
54. 幹線道路沿道における主観的健康—感受性を考慮した分析—	共	2004年12月	第7回音響学会関西支部若手研究者交流研究発表会	岸川洋紀, 松井利仁, 森尾謙一, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 騒音曝露による健康影響および個人差に関する研究について、音響学会関西支部での研究発表会において発表した。 (第7回音響学会関西支部若手研究者交流研究発表会概略集, P. 17)
55. 騒音感受性評価手法の妥当性の検討—騒音暴露実験による検討—	共	2004年09月	日本音響学会研究発表会	森尾謙一, 岸川洋紀, 松井利仁, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 実験室実験によるWeinstein質問紙の問題点の評価および改良した手法の提案を行った。両尺度および別途フィールド調査結果から得られた尺度の妥当性の検討を行い、より適した尺度の提案を試みた。 (日本音響学会講演論文集, PP. 897-898)
56. 騒音による生理学的影響の個人差とその要因の検討	共	2004年09月	日本音響学会研究発表会	宮川雅充, 松井利仁, 岸川洋紀, 村山留美子, 内山巖雄, 伊藤俊弘, 吉田貴彦 実験室実験による騒音曝露とストレスホルモン、およびアノイアンスとの関連について報告を行った。 (日本音響学会講演論文集, PP. 911-912)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
57. 騒音感受性評価手法の妥当性の検討—フィールド調査による検討—	共	2004年09月	日本音響学会研究発表会	岸川洋紀, 森尾謙一, 松井利仁, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 騒音感受性の評価について, 既存の方法の問題点の指摘および改良版の提案をフィールド調査結果から行った。 (日本音響学会講演論文集, PP. 899-900)
58. 幹線道路沿道における主観的健康—感受性を考慮した解析—	共	2004年09月	日本音響学会研究発表会	松井利仁, 岸川洋紀, 森尾謙一, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 道路沿道で行った騒音測定および健康影響評価から得られた量反応曲線について報告を行った。 (日本音響学会講演論文集, PP. 901-902)
59. 騒音感受性評価手法の妥当性の検討	共	2004年07月	環境衛生工学研究18巻3号	森尾謙一, 岸川洋紀, 松井利仁, 村山留美子, 内山巖雄, 宮川雅充, 平松幸三 実験室での騒音暴露とアノイアンスに対する実験結果から, 既存の感受性評価方法であるWeinstein質問紙の問題点を明らかとした。 (環境衛生工学研究, 18巻3号, PP. 186-191)
60. 騒音に係る新旧環境基準の達成状況の比較について	共	2002年09月	日本騒音制御工学会研究発表会	岸川洋紀, 宮川雅充, 内山巖雄 環境基準改訂による地域別の達成率の変化を調べ, 現行環境基準で特例的に設定されている幹線道路近接空間の問題点を報告した。 (日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, PP. 5-8)
61. 騒音に係る新旧環境基準の達成状況の比較に関する研究	共	2002年07月	環境衛生工学研究16巻3号	岸川洋紀, 宮川雅充, 内山巖雄 環境基準改訂による達成率の変化について, 騒音測定結果をもとに考察した。基準改訂の問題点を学会で報告した。 (環境衛生工学研究, 16巻3号, PP. 214-219)
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. リスクリテラシー向上を目指した一般市民の科学技術等の認知構造の現状に関する研究	共	2011年	独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (H20~22) 報告書	村山留美子, 内山巖雄, 中畝菜穂子, 岸川洋紀 全国の成人を対象とした一般市民のリスクや科学技術に関する認知レベルとその構造の把握のための調査結果について, 各種学会や論文で発表した内容を報告書としてまとめている。(分担研究者)
2. リスクコミュニケーションを目的とした, 環境リスクに関する認知構造解析と一般市民の各種属性に関する研究	共	2009年	平成19-20 年度環境技術開発等推進費 (健康リスク評価) 研究開発費報告書	内山巖雄, 村山留美子, 藤長愛一郎, 中畝菜穂子, 岸川洋紀 実験室や疫学から得られたリスクの情報を実際の政策に反映する際には, 一般市民の意見も重要となってくる。どのような要因によって一般市民の認知が形成されているのかについて多方面から検討を行った。(分担研究者)
3. 奈良県医療費適正化計画, 第2章, 資料編	共	2007年	奈良県医療費適正化計画案に係る総合コンサルティング業務委託報告書	安川文朗, 岸川洋紀 奈良県からの委託業務として受注し, 県内の医療費の構造について様々な視点から分析を行い, 今後の医療政策の基礎とするためのデータを作成した。
4. 大規模感染症発生時の効果的かつ適切な情報伝達の在り方に関する研究	共	2005年	平成16年度厚生労働科学研究費補助金 (新興・再興感染症研究事業) 報告書	内山巖雄, 村山留美子, 中畝菜穂子, 岸川洋紀 感染症の発生時の行政, マスコミ, 専門機関, 一般市民の情報伝達の在り方について, 現状の問題点をSARSの事例などからまとめるとともに, 今後の課題についても検討を行った。(研究協力者)
6. 研究費の取得状況				
1. 3.11後の市民のリスク対応行動と認知の構造, その変動に関する研究	共	2015年	独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (H27~29), 基盤B, 研究分担者	村山留美子, 藤長愛一郎, 岸川洋紀, 内山巖雄
2. 疫学研究の調査結果を用いた, 高齢者における心血管疾患と騒音・振動曝露との関連性の解析	単	2014年	平成26年度日本自動車研究所 (JARI) 受託研究費, 研究代表者	岸川洋紀
3. 市民のリスク認知とゼロリスク要求の構造と変化: 新たな合意形成手法の開発に向けて	共	2012年	独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (H24~26), 基盤B, 研究分担者	村山留美子, 藤長愛一郎, 岸川洋紀, 内山巖雄
4. リテラシー向上を目指した市民の震災後の環境リスクの認知構造とその変化に関する研究 (ZF-1202)	共	2012年	環境省環境研究総合推進費 (H24~H25), 研究分担者	村山留美子, 藤長愛一郎, 岸川洋紀, 内山巖雄
5. リスクリテラシー向上を目指した一般市民の科学技術等の認知構造の現状に関する研究	共	2008年	独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (H20~22), 基盤B	村山留美子, 内山巖雄, 中畝菜穂子, 岸川洋紀

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
6. リスクコミュニケーションを目的とした、環境リスクに関する認知構造解析と一般市民の各種属性に関する研究	共	2007年	，研究分担者 H19-20年度環境技術開発等推進費（基礎研究開発課題）（健康リスク評価），研究分担者	内山巖雄，村山留美子，藤長愛一郎，中畝菜穂子， 岸川洋紀

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2015年10月～現在	日本騒音制御工学会社会調査データアーカイブ分科会会員
2. 2014年11月～現在	滋賀県大津市廃棄物処理施設に関する意見聴取会会員
3. 2010年～現在	日本自動車研究所（JARI）疫学研究会委員
4. 2009年11月～2015年10月	滋賀県大津市環境影響評価専門委員会委員
5. 2009年05月14日	日本騒音制御工学会守田栄論文賞受賞
6. 2007年11月29日	音響学会関西支部若手奨励賞受賞
7. 2006年05月24日	日本騒音制御工学会研究奨励賞受賞
	日本騒音制御工学会
	日本リスク研究学会
	廃棄物資源循環学会